HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	まち歩き観光における住民の役割パフォーマンスに関する研究 ： 長崎さるくを事例として［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	金, 明柱
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(観光学)
Dissertation Number	甲第14419号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/81253
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Kim_Myeongju_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）　　氏名：金　明　柱

審査委員　主査　教授　山　田　義　裕
副査　教授　清　水　賢　一　郎
副査　特任教授　下　休　場　千　秋

学位論文題名

まち歩き観光における住民の役割パフォーマンスに関する研究

――長崎さるくを事例として――

本論文は、観光まちづくりの成功事例と評価されている「長崎さるく」について、5 年間にわたる参与観察および聴き取り調査を通じて、その変化の過程やまち歩き観光としての特徴を明らかにするとともに、ホスト・ゲスト論、パフォーマンス論そして社交論の観点から分析を行い、この事例がもつ観光研究にとっての意義について考察を試みたものである。

まず、本論文の構成と各章の概略について述べる。序章に続き第 1 章から第 4 章までが事例研究、終章において結論を論じている。序章では、本研究の目的と 4 つの研究課題を提示し、それらを考察するための理論的枠組みとしてホスト・ゲスト論とパフォーマンス論を挙げ、その必要性について先行研究の批判的レビューとともに論じている。また、研究方法としては、参与観察と聴き取り調査に基づくエスノグラフィーの手法を取ることが明示され、本研究の特徴として自らのガイド体験を通じたオートエスノグラフィーを有効に活用することが述べられている。第 1 章では、「長崎さるく博'06」の成立過程を調査し、主にこのまち歩き観光への行政の取り組みについて批判的に考察している。第 2 章では、さるくガイドたちがガイド活動にどのような生きがいを求めているのかという問を立て、参与観察と聴き取り調査からその実態を探っている。第 3 章では、長崎さるく博'06 の後に数年の活動停滞期を経て、住民同士が自らガイドや参加者となり、学さるくを中心とした新たなまち歩き観光を作り上げていく実態について、詳細なフィールド調査に基づき明らかにしている。第 4 章では、第 2 章と第 3 章のフィールド調査による分析を踏まえて、第 1 章で論じた行政の長崎さるくへの関与について、行政と住民（ガイドおよび参加者）の双方に聴き取り調査を行うことで再評価を試みるとともに、その限界についても議論している。終章においては、第 1 章から第 4 章までの事例研究に

ついて、ホスト・ゲスト論、パフォーマンス論という 2 つの理論的枠組みの中で考察している。パフォーマンス論からの考察については、Erving Goffman のドラマトゥルギーの諸概念に依拠して分析し、さらにそれを Tim Edensor の観光空間の議論へと接続を試みている。ホスト・ゲスト論については、ホスト・ゲスト関係の流動性について、先行研究の批判的レビューを踏まえて役割パフォーマンスに依拠した独自の議論を展開し、さらにその議論を Georg Simmel や山崎正和の社交論へと発展させて、長崎さるくという観光現象の観光研究にとっての意義について考察している。

次に審査委員会において審査員から提示された指摘について述べる。口頭試問においては、審査委員会から本博士論文について、まず次の点で高い独創性を有する価値ある研究であるとの評価があった。第 1 に、現地に住み込んでの聴き取り調査、および自らガイドの資格を取得の上行った参与観察を通じて得た経験的資料に高い資料的価値がある点である。第 2 点として、こういった豊富な経験的資料を丹念に分析し、長崎さるく博'06 後に活動停滞期を経て生まれ変わった長崎さるくの中に新たな観光まちづくりの意義を見出した点である。第 3 点は、長崎さるくの活動において住民がガイドあるいは参加者として主体的に関与している実態を明らかにした上で、特にガイドと「常連」参加者との関係性に注目することで、役割パフォーマンスに依拠した独自のホスト・ゲスト論を展開し、さらに住民の主体性を「生きがい」という観点から社交論へと結びつけて意欲的に考察を試みている点である。

その一方で、口頭試問及びその後の審査会議では、議論展開が不十分な点や記述が不足している点として、次の 3 つの指摘があった。第 1 点は論文の構成についてのものだが、関連した章の論理的関係について説明がやや不足している点が指摘された。第 2 点は、先行研究を批判的に考察して新たなホスト・ゲスト論を提案しようという意欲は評価できるものの、その際に依拠するパフォーマンス論の重要概念の特徴付けが不十分なため、その分説得力が弱くなっているという指摘である。第 3 点も基本概念とその議論への適用の問題であるが、パフォーマンス論を観光空間論へと接続する際に、その基本概念の応用やこの試みの潜在的意義の掘り起こしが不十分な点が指摘された。このような、論証や議論展開において個別の問題は一部あるものの、長崎さるくというまち歩き観光について、これまで見過ごされてきた重要な特徴を明らかにし、それが観光研究にとってもつ意義を考察した点は高く評価できる。

以上から、審査委員会では博士（観光学）学位の授与に値するものとして、本論文を合格と判断した。